

---

# ディーラー・プシャ 『2番の女王篇』

じかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ディーラー・プシャ『2番の女王篇』

### 【Nコード】

N5024Z

### 【作者名】

じかん

### 【あらすじ】

カジノのディーラー、プシャと彼女とお客さんとのその一時のコマです。

「おはよう、プシャ」

「おはようございます、社長」

「今日から此処に戻るんだっただな」

「はい。そうです」

「ところで、このテーブル昨日は大分酷かったぞ」

「はい、そのようですね。先程少し投げてから調整して、それから一時間位投げていますが、今は散っています」

ディーラーのプシャが、社長にルーレットのテーブルに置かれているチップを指差す

と、社長はチップを見て満足そうな笑顔を見せて頷いた。

「いらつしゃいませ」

「いらつしゃいませ」

スタッフの誰かが言うつと、皆、条件反射で声を出し入り口を見る。「2番の女王のお越しだ」

社長がプシャに囁いてから、テーブルを離れ階段で上の階に上がった。その女性、2

番の女王と呼ばれる女性の年齢は30才前後で、ベージュのレディースーツを着てい

る。チェックカウンターに迷うことなく向い、ビジネスバッグの中から1万天札の束を三つで300万天出した。カウンターの内の女性スタッフから、さほど大きくない板状

の薄い長方形に近いチップの入った小さなバスケットを受け取り、プシャが居るルーレットのテーブルに来て椅子に腰掛けた。

「いらつしゃいませ」

「こんにちは」

女性がテーブルに着くと、店内で飲み物、灰皿などを担当する女性スタッフが女王の横に行きお飲み物を伺い温かいおしぼりを置いた。彼女たちはお揃いのベストに濃紺の

パンツを穿いており、青系統でトータルコーディネートをしている。プシャたちデー

ラーも黒の蝶ネクタイに白のワイシャツで黒のパンツ姿だが、女性スタッフとは色の違

う黒色のベストを着ている。

「ヘネシーの水割りを薄めてお願いね。おつまみはいらないから」

「かしこまりました」

女性スタッフは一礼してから、直に飲み物を運んで来た。

「ありがとうございます」

女性は一言そう言うとバスケットから10万天の板状のチップを10枚出した。

「チップは何色がよろしいでしょうか」

「青色でいいわ」

「かしこまりました」

チップを数えてからプシャは、1万天チップが20枚単位で積みれた青色のチップを

5本女性の前に出したので、百万天ある。ちなみにディーラーであるプシャの給料は1ヶ月80万天だ。

プシャが右手の中指と人差し指で玉を挟み、ホイールを軽く指で2、3回トントンと

叩き反時計回りにゆっくり回すと、玉を時計回りに投げてベルを一回鳴らして、ベットを知らせた。

2番の女王は1万天のチップを3枚、2番の一目賭けをした。ピ

ンゴ張りである。ビンゴ張りとは、その賭けた数字に入れば、ほぼ最高の配当を得られる張り方のことだ。数字の位置関係により配当が変わるので、多くの数字と接している所に張ればそれだけ配当が増える。

このお店はアメリカンスタイルを採用しており、その中で一番配当が高いのが2番で、七つの数字と関係しているためだ。一ヶ所の上限も2千天までとしていて、千点チップ二枚までが上限であり、一目賭けだけに賭けて入ると7万2千天になる。その上限はほぼ全ての箇所近千点チップが2枚ずつ置かれるが、面倒なので上限一杯を表すために3万天分テーブルに描かれている柵の中に張る。この場合女王が張った2番に玉が入ると、43万2千天だ。ルーレットの1目賭けは36倍で、2目賭けは18倍で、3目賭けは12倍などあり、ほとんど全ての配当を含むため高配当になる。極端なことを言ってしまうと、賭け事は単価を上げればいくらでも賭けられる。

チップを数多くの場所に張ると当たる確立は上がるが、張るチップが多いのでトータルではチップはあまり増えない。

「ノー・モア・ベット」

プシャがテーブルの上に手を伸ばしたが直に引っ込めたのは、女王は2番に賭けているだけなので、お客さんの手を止める必要が無い。それにプシャのテーブルにしかルーレットのお客さんは居ない。

玉の回転速度が緩やかになり、玉がカ

タコトと音を立てて  
ポケットに入った。

「18番です。失礼します」

女王はバッグからタバコを出し、テーブルに置いてある使い捨て  
ライターで火を点け

た。ハウスではお客がタバコを銜えても火は点けないのが普通だ。

お客に火が点かない  
ようにすることが理由である。お客さんが炎上しないように、と言  
う方が分かりやすい  
かもしれない。

お店には7台のブラックジャックのテーブルがあり、他にバカラ  
の大小のテーブルが  
8台あり、ルーレットは5台のテーブルがあり、ポーカーのテーブ  
ルも6台ある。

今日はまだ時間も早くて、がらがらに近い状態だが、時折ブラッ  
クジャックやバカラ  
のテーブルの方からのお客さんの独り言や、笑い声、ディーラー相  
手におしゃべりしな  
がらゲームを楽しんでいるのが窺い知れる。

玉を掴みホイールを軽く弾いて、また投げてベルを鳴らす。女王  
はまた、2番に3万  
天張った。

なるほど。プシャは先程の社長の言葉に加えて、支店に応援に行  
っている時に聞いた  
噂話を思い出した。2番のビンゴ張りしかしないお客さんとは、こ  
の方が。盤を見たが  
今回は2番の近くに入りそうだ。

「ノー・モア・ベット」

女王が水割りを手を持ちホイールを眺め、プシャも見た。玉がピ  
ンに当たりポケット

に入った。

「28番です。失礼します」

チップを回収して、また玉を投げ、ベルが鳴る。女王が2番に賭ける。

「あなた新人さん？」

「僕ですか？僕は新人ではありません。W街にこのお店の支店が出来たので、応援に行っていました」

「あら、そうなの。わたしはこのお店では新人よ。それから、今度そちらのお店にも行かせていただくわ」

2番の女王は穏やかで魅力的な微笑みを浮かべて、綺麗な歯並びの美しい白い歯を少し見せてから自らの黒くて光沢のあるストレートのショートヘアを手で撫でた。

「ありがとうございます。よろしくお願い申し上げます。支店にはスロットマシンもこのことは違い置いてあります」

「スロットマシンも面白くて好きだわ。それからわたしは、マガと言うの。あなたは？」

「僕は、プシャと申します」

「よろしくね。プシャさん」

「よろしくお願いします」

プシャはそう言うのと深々と頭を下げ丁寧に感謝の意を示した。2時間位投げていた

ら、バスケットに入っている板状の高額チップも残り少なくなった。女王の丸い1万天

チップが適当に積まれているので正確には分からないが、100万天切ったように見え

たのでプシャは2番を狙うことにした。このお店グランプリは、お客をコロスようなこ

とはしない。医学的とかではなくて、細く永くのお付き合いをお店の総意で接客する。

ディーラーがあまり強く調子よくても、敢えてディーラーチェンジをしたりして調整

する。お客は敏感にそのことを悟るので、それがこのお店を繁盛させているのでも分かる。

ホイールを軽くトントンと叩きながらホイールの回転速度をイメージしてピンを狙

い、右手の中指と人差し指に神経を集中させて玉を投げた。女王は相変わらず2番に3

万天をビンゴ張りしている。

「ノー・モア・ベット」

女王には必要のないことだが一応言葉を述べる。玉の回転速度が遅くなりピンに当

り、2番に入った。

「おめでとうございます。ナイスビンゴ。43万2千天です」

プシャがカチャカチャチップを人差し指で5枚ずつ切り数えて、

20枚積まれた1万

天のチップ43枚の上に千天のチップを2枚重ねて2番の女王に差し出した。女王はと

ても嬉しそうにチップに軽く撫でるようなチップに触れた。その後も時々2番に入った

が、2番の女王はチップを換金することなく全て使い「また来るわね」と言っ

た。

コーヒーショップの窓際の席に座り、リバティは歩道を歩いている。



る人の流れを見ていた。

プシャが店に入るとリバティは直に見つけたので、手を振り合図をした。

「ごめん。待った?」

「いいえ、ちよつと前に来たところよ」

彼女の言葉を聞いてから、プシャはコーヒーを口に運んで一息ついた。リバティも紙カップを持ち口につけた。

「何食べようか?」

「焼肉は?」

「いいね、そうしよう」

リバティの提案に賛成して、二人は紙カップを持ちコーヒーショップを出てから焼肉店に向った。

焼肉店では彼女が主に決めて注文して、二人はウーロン茶で乾杯した。交際を始めて

1年位だが、食べ物の好みは一緒だ。肉とかナムルなどを適当に注文して、二人とも石

焼ビビンバが好物でよく食べる。リバティが焼き加減を見てから、プシャのお皿と自分

のお皿に肉と野菜を適当に置いていく。

「ところで、モデルの仕事は順調?」

「そうね。まだまだモデルになったばかりだし、勉強の毎日でモデルのひよこね。あち

こちに同期のモデルさんと一緒に挨拶周りのようなことをしたり、先輩のお仕事の現場

を見て学ばせていただいたり、少しでもわたしの顔を覚えていただけるようにしている

わ。知らないことが多くて楽しいのよ。それでね、最初に色々と言

われたんだけどその

中で、SEXに関しては後背位でするようにって言われたわ。正常位でSEXすると身

体の線が崩れるらしいのよ。事務所の先輩のモデルさんたちは、エッチした人は見れば

分かるって言うていたわ。だからあなたも気を付けてねって。私も慣れれば誰がSEX

したとか見分けがつくようになるでしょうって。本当かな？」

「へえー、そうなんだ。プロがそう言うなら本当のような気がするね。そう言えばリバ

ティがモデルになってから一週間で、まだSEXしてないね。それなら僕たちもその先

輩のお言葉をありがたくいただいて、細心の配慮でSEXに臨もうね」

「うふふ、もおう、エッチなんだから」

リバティは顔を仄かに紅く染めてから、小声でけらけら笑った。

品の良い目に無邪気が見てとれた。

二人は満足して焼肉店を出ると外は雪景色でちらちら雪が舞っていた。

「メリークリスマス。ホワイトイブだね」

リバティは手の平で雪を捕まえようとした。

「メリークリスマス。今日は僕の部屋に泊まって、明日は映画を観てから何処かでラン

チをしよう。それからリバティが明日はオフだから、着る服をこれから買いに行こう。

クリスマスプレゼント兼、就職祝いだ。どう？」

プシャがそう言うのとリバティは手足をバタつかせて、身体全体で嬉しさをコミカルに

表現して、通行人の笑いを誘いくすくすと微かに漏らして二人の横

を歩いていく。それ  
からプシャの左の腕に絡み付き、プシャの頬にキスをして愛と喜び  
の表情に二人の心に  
は花が咲いていた。そして駅に向う人の流れに身を任せ歩いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5024z/>

---

ディーラー・プシャ 『2番の女王篇』

2011年12月17日00時57分発行